

4

渋沢栄一のフィランソロピー活動における
医薬・医療・福祉との関わり

町 泉寿郎

二松学舎大学

【発端】

「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一（1840～1931）は、教育・民間外交等さまざまな公益事業に関与したことで知られる。儒教道徳を行動指針とした渋沢は、漢学者三島中洲（1831～1919）と「道徳経済合一説」「論語と算盤」の考えで意気投合し、経済人の地位向上を求め官尊民卑の打破を説いた。演者は近年、渋沢栄一記念財団の研究活動に参加して渋沢の公益事業と漢学の関わりについて考究し、その成果を『渋沢栄一と「フィランソロピー」』8巻（ミネルヴァ書房、2017～）に発表しつつある。近年DB公開された『渋沢栄一伝記資料』を初めとする膨大な研究蓄積の中で、その医薬・医療・福祉に関する活動にどのようなものがあったのかは、従来あまり知られていないので、ここに概観してその特徴を考察する。

【医薬・医療・福祉組織】

（東京養育院）松平定信の発案による七分積金の運用団体である江戸町会所は維新後、東京会議所に継承され、都市インフラ整備の一環として養育院が開設される。院長となった渋沢は定信忌日の毎13日に登院し、基金の利息等による無理のない組織運営をはかった。同院は児童収容のほか、看護婦・産婆の養成も行った。

（東京慈恵会医院）1907年財団法人化以来副会長を務めた。

（恩賜財団済生会）1911年5月30日皇室より施薬救療のため155万円下賜。渋沢は原敬首相・平田東助内相らと協議して財団設立に関わり、顧問・評議員となった。

（日本結核予防協会）初め副会頭、1921年財団法人化以来、会頭を務めた。

（中央盲人福祉協会）1928年視覚障害者団体の全国的連絡を図るため組織し、会長を務めた。

（財団法人癩予防協会）H.リデル・光田健輔等の癩治療を支援し、1931年設立時に会頭を務めた。

（滝乃川学園）石井亮一創始の知的障害者福祉施設。渋沢は財団法人化にあたり理事長となった。

【医薬・医療・福祉関係の人物との交流】

（高松凌雲 1837～1916）幕末渡欧時に交流があり、高松設立の社団法人同愛社で渋沢は特別社員となった。

（高峰譲吉 1854～1922）農商務省技師時代の高峰と相知り、1887年に東京人造肥料会社を設立して人工肥料の製造に着手。1893年渋沢は取締役会長。のち高峰等の提唱に呼応して、理化学研究所設立に尽力した。

【考察】

渋沢が関与した公益事業は、漢学振興・女子教育・宗教問題・医療養護施設・監獄環境改善・労使協調・文化財保護など多岐にわたるが、旧主徳川家や親族・郷里など個人的縁故のある施設のほかに、国家的な視野に立って公益性が高く国の支援が届きにくい施設・団体・問題等への支援であったように見える。明治初年に遡る東京養育院への関与は偶然のことであったが、松平定信など前近代の社会事業に対する評価の契機となった。単なる出資ではなく、影響下にある銀行と組んだ金利運用による経営などの点に、近代経済人らしい運営上の特色が見出だせる。渋沢の公益事業を支えた留岡幸助・安達憲忠・原胤昭ら多様な実務家の存在は見逃せないが、一方で渋沢は平田東助・床次竹二郎・水野鍊太郎・井上友一・窪田静太郎ら内務官僚と親交があり、自ら会長を務めた中央慈善協会などにみられるように、日露戦争後の内務省の内政諸策と渋沢の公益事業は不可分の関係にあった。渋沢の公益事業を全体として見るとき、そこに旧来のチャリティーとは異なる新興経済人によるフィランソロピーとしての性格があり、しかも西洋世界とは異なる東洋思想に基づくことに、現代においてもなお考えるべき意義がある。